

「映像」と「見る」ことの考察

——映像表現教育のための基礎理解として——

神 林 優

【はじめに】

映像というメディアの一つに「写真」がある。レンズを通して映し出される像を指す「映像」という言葉。今日では静止画の写真に対して、動画を映像と呼ぶことが一般的かもしれない。動く映像はその初期に「活動写真」と呼ばれていたことから明らかなように「写真」から生まれたものだ。マイブリッジらの連続写真（図1）から始まる、運動の記録と再現の試みは、1893年のエジソンのキネトスコープ、リュミエール兄弟のシネマトグラフ¹⁾による映画の発明へと続く。

写真が発明され、映画が発明され、カメラを通して映像で世界を記録し始めた私たち。現在ではデジタルメディアの出現により、映像はより身近で手軽なものとなり日常に溢れている。そして、世界を見尽くす、記録するという欲望は尽きることなく、ついにはグーグルアースのように、地球全体を映像化し、パソコンのモニタ上では鳥になって空から地上を眺めるかのように、また通りに降り立ってそこを歩いているかのように世界の至る所を見ることができるようになった。

こうして「写真」や「映像」などの「イメージ」があまりに日常化・環境化した現在においては、世界を「見る」という行為は、大きく「映像的事実」に依拠することになる。つまり、自分がどこかへ行き、見、知ること（経験・体験すること）より「映像」というイメージを通して世界を知るという傾向が強くなっているのだ。

「映像」というメディアを、「写真」を中心に概観しながら、「見る」ことや「映

像」をどのように捉え、学ぶことが可能かを考えたい。

【写真の誕生 カメラではなく】

写真が発明されたのは1839年になる。実は写真の発明に関して話しをするとき、ここで大きな誤解が生じるケースがある。写真の発明は「撮影とその撮影された画像の定着技術」が発明されたのであって、カメラは既に遙か昔から存在していたという事実が忘れられてしまうことだ。写真の発明により、カメラを通して得られるその細密な世界に関するイメージが、定着可能になったことに人々は驚嘆した。しかし、カメラそれ自体は、写真の発明の遙か昔から存在していたのだ。

カメラの発明に関しては諸説あるが、その根幹であるカメラ・オブスクラに関する記述で最も古いものは紀元前5世紀頃の墨子が、穴を通して得られる倒立像についての正確な観察記述をしている²⁾。さらに、紀元前4世紀頃にはアリストテレスが木漏れ日の形が丸いこと、日食のときには欠けた形になることに触れている³⁾。

その後、11世紀頃にイラン人の数学者で哲学者でもあるイアン・アル・ハサイムが『光学の書』⁴⁾で正確なカメラ・オブスクラの原理について記した。15世紀頃になると、レオナルド・ダ・ヴィンチが『アトランティコ手稿』⁵⁾でその原理に触れていることから推察される通り、画家たちはより精密な絵画を描くためにカメラ・オブスクラを活用していた。そして、1558年ナボリの学者ジョバンニ・バティスタ・デッラ・ボルタの『自然魔術』⁶⁾での紹介記述などを通じ、広く流布していくこととなる。この頃になるとカメラ・オブスクラは鏡やレンズを利用し、より鮮明で明るい像を得ることができた。時代を経るごとに研究も進み、17世紀にはレンズからの光を反射させスクリーンに映し出すフレックス型カメラ・オブスクラ(図2)も登場する。

つまり、人々は写真が発明される数百年も前からカメラによるイメージを目(図3)にしていたのだ。

【「写真」の誕生以前】

しかし、「写真」の誕生以前には、カメラ・オブスクラを通して得られた画像をそのままに定着することができる技術は、もちろんなかった。人間の手によってそのイメージを描くことで再現するしかなかったのだ。どんなに精密に描かれた画像でも、手によって描かれたそれは写真とは大きく異なる。

少し横道にずれるが、言葉を例に考えてみたい。

私たちの祖先が類人猿から人類へと別れたのがおよそ600万年前であると言われている。そして、現生人類=ホモ・サピエンスが20万年前に現れ、その頃には簡単な発話「あー」や「うー」など鳴き声に近いものによる強弱・長短を織り交ぜた歌のような音声によるコミュニケーションをしていたという。そして、およそ10万年前になるとかなりの数の言葉を使用するようになる。言葉により個体の持つ記憶や思考が外部化される。外部化された記憶や思考は、他者と共有可能な情報になる。個人の情報はその個体のみならず、個体が属する集合体の情報なり、狩りの効率化や危険の共有など自然淘汰を生き残る大きな要因になったという。(ホモ・サピエンと平行して存在していたネアンデルタール人も同様に単純な言葉によるコミュニケーションを行っていたことが分かっているが、彼らは骨格の特徴(喉が短かった)により、私たちの祖先より発音できる語が少なかったという。このため、ネアンデルタール人は生存競争を生き残れなかったのだ。7)

そして、数万年前には言語(制度)に基づいた社会を形成し始め、複雑な抽象思考もできたようだ。

情報は他者との共有や記録のみならず、自己の参照点にもなるからだ。この頃には現存する最古の絵〔ショーベ洞窟の壁画⁸⁾(図4)はおよそ3万年前に描かれた〕が示すように、集団での祭祀—政治が始まったと考えられている。手で描かれた呪術的なイメージへ狩りの成功を祈り捧げ、物事を言葉を使って話し合うことにより共有し、合議によって決定していたのだ。

およそ8000年前には、私たちの祖先はその絵を基にした象形文字⁹⁾を発明し使用するようになる。農耕を開始したことにより、食料事情の改善による人口増加と集落の形成、それに伴う経済活動で会計や記録、祭祀(政治)

の複雑化も生じたためだ。社会の規模の拡大に伴いより複雑な言葉を使用するようになり、各集落間に交流が生じることにより言語の違いを解消したり、記録をより確実に残すために絵文字という記号を発明したのだ。さらにその後の「線形文字¹⁰⁾」の発明により、より広範囲での共有と交換可能な情報を獲得すると同時に、文字＝テキストによって世界は記録されていくことになる。人々の活動、政治や交易などの記録を文字で記録・保管し、個人の思索や実践も文字に書かれ書物が作られるようになる。情報は共同体という横軸に留まらず、時間を超えて共有される縦軸である歴史となる。文字という情報テクノロジーの登場によってヒトの社会には〈抽象化〉と〈普遍化〉という方向性が鮮明にあらわれ、世界は時間とともに移ろいゆくものではなく、空間的な構造を持ち分析できるものになったのだ¹¹⁾。

さらには、1450年に活字印刷¹²⁾によるドイツ語訳聖書が刊行されると、〔印刷技術自体は2世紀に中国で木版印刷が発明された。現存する最古の印刷物は日本の百万塔陀羅尼で770年に作られたもの。〕その50年後、欧州にはおよそ1,000の印刷工場があり、30,000種類6,000,000冊の書物が流通するほど爆発的に広がったという。書物（情報）の大量流通時代の幕開けであり、情報環境の大転換点となった。例えば、この時代になると、それまでは王など特別な存在の声により行われていた政治は“書かれた法律”にその主軸が移行していく。手書きの文字のように一冊一冊が異ならず、しかも大量に同じもの＝複製を多くの人が共有することが可能な情報のフォーマットを得たことで、言葉＝言語の規範化がさらに進む。そして、廉価で揺らぎの少ないこうした印刷本による情報が万人に普く行き渡る。手書きの本で空間化された言葉は、印刷技術による語句の位置が厳密に定まった本による「索引」の出現によって空間的なデータベースとなったのだ。世界は“特定の人”のものから“多くの人々”のものへ変換したのだ。要するに、我々が日常生活で使っている〈情報〉という概念、つまり記号を検索して利用する物という常識的な概念は、印刷本とともに出現した¹³⁾のだ。そして、現代ではデジタル技術による新たな「情報空間」の出現により、テキストによる「情報空間」はさらなる巨大化を今この瞬間も続けている。

きわめて粗くではあるが、言葉の概観史をたどってみた。声に出された言

葉、手で書かれた言葉、印刷された言葉、同じ「言葉」ではあるが、それぞれがまた異なった作用を及ぼしているのだ。「イメージ」を考え理解する際にも、このことを整理し理解しておくことが手助けになる。

【「写真」の誕生—写真で世界を記録すること】

先にも述べた通り、1839年にフランスのパリ化学・芸術アカデミーでフランソワ・アラゴーによりダゲレオタイプの発明が発表された。私たちは言葉-文字テキストで行ってきたように、写真を手始めに「映像」で世界を記録することを始めたのだ。それから175年経った今日、私たちは映像を目にすることなく一日を終えることはない。

写真の誕生はどのようなインパクトを我々に及ぼしたのか。言葉と同様にイメージ=画像も、原初は手で描かれたものであった。写真が発明されるまで、その後も、様々な創意工夫でイメージは手で描き続けられてもいる。では、写真は手で描かれたイメージと、どう異なるのだろうか。

誰かによって描かれたイメージは、それがどんなに精密で細密であっても、そこに描いた者の解釈、すなわち意図による省略やディフォルメなどの取捨選択が含まれてしまうため、揺らぎがある。印刷された言葉が持つような厳密な規範化が働くことはないからだ。絵を描くのにコツや基本的な了解はあれど、これはこう描かなければいけないという規範は有効ではない。その自由さ（作者の意図）が絵の魅力であるからだ。

しかし、写真は誰が撮っても（ピントや露出などの技術的な問題をクリアしてさえいれば）目の前の事物がそのままに記録される。この特性が「写真」に真実性を与え、例えば話を聞いても信じられないような事件でも、一度その写真を見せられると信じてしまう。

絵画や言葉で世界を記述すること、それは取捨選択した解釈—つまりは創作物として認識されるが、「写真」は印刷された辞書のように正確で揺らぎがなく、網膜場の経験をそのまま外在化したものであるかのように認識されるのだ。

しかし、写真が今日のように当たり前になるまで、発明されてから間もなくの頃は、撮影には今では想像もできない程の時間がかかり、それを現像し定着するにも高度な技術と知識、そして資金も必要とした。写真は特別なものであった。写真は何かの目的のために撮影され、特別なものとして扱われたのだ。かつて文字を扱える人が限られたエリート達だったことと同様に、写真もまた限られた人のみが扱うことのできるメディアであり、一般的なものではなかった。

その後の技術進歩により、カメラや感光材料は小型化・高性能化され、撮影に一連の作業は、カメラがほぼ自動的に処理してくれるようなる。誰もが簡単に写真を撮れるようになるとカメラは爆発的に普及し、一般化された。そうして、多くの人がカメラを持ち写真を撮ることが珍しくなくなると、世界を写真で記録する速度は一段と加速することになる。それでもまだ写真として、そのイメージを目にするまでにはフィルムの現像・定着、プリントという専門的なプロセスを必要としていた¹⁴⁾。

一大転換点は、デジタルカメラの登場だ。フィルムを使用していた際に必要とされていた、この一連の作業にかかる手間——写真を目にすることができるまでのプロセス暗箱（ブラックボックス）としてあった作業と時間——は一気に自動化・高速化され、私たちの手の中に収まることとなる。写真を撮った次の瞬間にそのイメージを目にできるようになったのだ。そして、紙という物理的制約からも解き放たれた。

更に小型化が進み携帯電話にまでカメラが付属することで「写真」を撮り・見るという行為は、その歴史の始まりの非日常的な驚きでそれを目にした頃の段階から、今日ではメモをとる代わりに写真を撮るといった日常化した行為となった。

そう、カメラは今や、携帯電話から監視カメラなど多種多様なものが無数に存在し、それによって一日の間に生産されるイメージもまた、流通する・しないにかかわらず想像すらできない天文学的な数に及ぶはずだ。さらに、デジタル技術による新たな情報空間の発明とその急速な発展、環境化は、凄まじいスピードで進行し続けており、写真は今までにも増して、世界をイメージで覆い尽くしていく。我々は地球上の至る場所、至る時間を記録し続けているのだ。

もはや写真は我々の「見る」という行為の不可分な一部となっている。「テキスト」によるそれと同じように、写真の発明により「機械による揺らぎのないイメージ」による情報空間が生まれ、我々はそのただ中にいるのだ。

【「写真」とは】

では「機械による揺らぎのないイメージ」である写真そのものとは何なのであろう。「写真」を発明することで「見る」という視覚のシステムを外在化するに至った。そして「写真」という視覚の新たなイメージの表象を手にした我々は、このメディアに関する言説も積み上げてきた。「写真」とは何なのか、「写真」を見るということは何なのか、「写真」と現実との関係性は、写真の有用性は、等々。「写真」を語るとき、しかしここに大きな落とし穴がある。

「写真」の本質は（もしもそれが存在するものなら）、「写真」によってもたらされた「新しさ」意外のものではありえない。（略）「写真」は何か目の前にあるものを指すのであって、そうした純粋な言語活動の域を脱することができない。それゆえ、ある一枚の写真について語るのは正統なことだが、「写真」一般について語ることは、逆にそれだけありえないことである、と私には思われた。（略）何を写して見せても、どのように写して見せても、写真そのものは目に見えない。人が見るのは指向対象で（被写体）であって、写真そのものではないのである¹⁵⁾。

我々が目にする世界を、かくも鮮明にあるがままかの様に写し出しているかに見える「写真」だが、しかしその実、我々が「写真」を見て語ることとは、「写真」そのものではなく、バルトが言うように、そこに在る指向対象（被写体）を語ることなのだ。そこを避けて語ろうとしても、近距離から焦点を合わせた技術的な話しになるか、遠距離から焦点を合わせ「写真」という現象を考察することを余儀なくされること¹⁶⁾になってしまうからだ。写真そのものを語ることは、文字や言葉をそれ自体を語ることと同様にアプローチの仕方ではいかようにも捉えられ、またそれ故に捉えがたい、語りがたいものなのだ。

そして、今日のあまりにも日常的になってしまった写真を撮ること、写真を自動的な模写された世界だと信じてしまい、気楽に写真を撮る人が多くなればなるほど、写真の読解はますます難しくなる。なぜなら、誰もが写真はどのようにして作られるか、そして写真が意味するものが何なのかを知っているとはいえない¹⁷⁾ しまっていからだ。

では、どうすれば、「写真」を始めとした「映像」を捉え、語るが可能になるであろうか。

【「見る」ということ】

そもそも「写真」とは、これは我々の「視覚」を中心にした「見る」という行為（視覚を通じた脳の認識・記憶システム）のシミュレーションであると述べた。その結果を、外部化し所有を可能にするテクノロジーが「写真」なのだ。しかし、「写真」は「見る」ことそれ自体とはやはり異なる。「見る」という行為を視覚で情報を得、記録することとしてのみ捉えてしまうとことはできない。

「見る」という言葉には認知・判断・観察と言った意味が含まれていることをわれわれは知っている。つまり見ることにはある種の認識行為が絶えず介在しているのだ。英語の〈SEE という言葉をもちだすまでもなく、見ることは I SEE すなわち「わかる」という言葉と同義であった。眼を通して知識を得ることは「見ること」のまわりにいつもつきまとっている。われわれは色彩や明暗や形態と言った視覚的要素を感知するという単純な主体体験から見ることを始め、それを組み立て構成し、知覚してそれが自分にとってどのようなものであるかを認知しようとする。見ることには普段は気づくことのない実に複雑なシステムが組み込まれていて、それが作動しひとつの意味の流れをつくりあげるのである¹⁸⁾。

そう、何かを「見る」ということは、純粋な視覚視覚システムの働き = 目を通して知覚することとイコールではないのだ。

ものを見るとき、私に見えているのは単なる光ではなく、理解可能な形態

であり、漂流物が漁師の網に引っ掛かるように、光線は網、すなわち意味のネットワークにとらえられる。共有しうる視覚的経験を人々が織り上げて行くためには、一人ひとりが自分の網膜場の経験を、社会的に含意された了解可能な世界の記述にしたがわせなければならない。(中略) 主体と世界のあいだには、ありとあらゆる言説の総体が挿入されている。それによって、文化的構築物としての視覚性が形成され、視覚性は視覚(つまり媒介されない視覚経験)と異なるものになる。網膜と世界のあいだには、無数の記号のスクリーン(すなわち、社会的領域に組み込まれた、視覚に関する多種多様な言説の総体)が挿入されているのである¹⁹⁾。

私たちは、この自分の網膜場の経験＝個人的記憶—個人的な経験や学習、環境に基づく記憶の総体としての視覚性と、社会的に含意された了解可能な世界の記述＝社会的記憶、ありとあらゆる言説の総体が挿入されている文化的構築物としての視覚性の二つの視覚性を通して、あるいは大いに頼りにして「見る」という行為を行っているのだ。これらの視覚性が作用しなければ、眼前のものごと全てが混沌となり、意味をなさない空間へと変容してしまうだろう。我々の「見る」という行為は視覚を通した外界の知覚と、視覚性を通した脳での認識受容があって初めて成り立つ行為なのだ。何かを「見る」という行為、それは純粋な視覚のみの行為としてのみ生起するのではなく、視覚性を通して対象を、世界を認識するという行為であり、「視覚」＝媒介されない純粋な視覚経験のみで世界を見ることは、私たちの「見る」という行為に於いて原理的に不可能なことなのだ。

つまり、「見る」という行為は視覚システムによる知覚のみを指すのではなく、視覚を超えた心的な働きを指している。(中略) なんらかの表象を介してこの世界に現象する仕方、つまり生存の様式にほからない。視線とは「文化」でも²⁰⁾ あるのだ。

普段は意識に上がることのない「見る」という行為の深層の流れ、文化の現れでもある「視線」を、今日に於いては手軽に何もかもを写真に撮り記録することで、単純な知覚と記録という視覚経験に収斂してしまい、その証拠なる「写真」を手に入れることで安心し、「見る」ことを更に意識下の奥深くに追いやってしまっているのではないか。

写真撮影は経験の照明の道ではあるが、また経験を拒否する道でもあるのだ。写真になるものを探して経験を狭めたり、経験を映像や記念品に置き換えてしまうからである²¹⁾。「見る＝see」ことより、カメラで記録し映像にして所有してしまうことで、それを証拠として「見る＝see」ことに括弧をつけてしまってはならない。

「見る」ことと同様なものとして捉えてしまいがちな、あるいは自分が見ているのと同じ感覚で触れてしまっている、日常に溢れる写真や動画などの「映像」というメディア。しかし、その実は、「カメラという装置が捉える映像」は無差別的な機械的視覚であり、我々の「見る」という意識の知覚と意識の営みとは、また別な何かなのだ。

【まとめ】

ここまで「写真」や「動画」といった「映像」メディアを、「言葉」も含めた、世界を記述するためのメディアとして、その歴史も合わせて概観しながら、粗くではあるが述べてきた。当たり前過ぎて通り過ぎてしまっているのではないかと感じる事柄や、普段は意識することがないであろうことを、改めて疑問として設定し、問いかけ、それに応えてみようとすることで「映像」を再考した。

「映像」というメディアを教育現場で扱う際、何が撮られているのか、どういったテーマなのか等の内容や、どう撮れば美しく撮れるのか、どうカメラを扱えばいいのか等の技法に、教育や評価の軸足に置いてしまうことが多々あるのではないかと。もちろん、こうした事柄も非常に大切に、自分の表現を他者に手渡すためには習得しておかねばならないことだ。語法や文法がでたらめな言葉が、伝わりにくいのと同様に、映像表現もまたこうした事柄を無視しては、他者に伝わる表現はできない。しかし、そうした現実的に有用な事柄ばかりに主軸を置き、映像の持つ特質や、その本質を探究する姿勢を忘れてしまうなら、他者の心に深く刺さる表現や、長く歴史に残るような表現も生まれてこないのではないかと思う。

大切なのは、自らがいる“今”という「歴史という縦軸」と、「現実とデジタル技術が作る情報空間に広がるこの世界という横軸」の交差点から、広く見渡し、学び、自らの「視線」を得ていくことなのではないか。決して流麗ではない言葉も人の心を打つ。何気ない光景を写した映像に心揺さぶられる。それは確固たる視線の先にある言葉や映像なのだ。

註

- 1) 1835年にアメリカでエジソンがキネトスコープを発表。
1839年にパリでリュミエール兄弟が現在の形式とほぼ同様の映写システムを発表し、有料の上映会を開催した。
- 2) 墨子紀元前450-350年頃『墨子(53編現存)』に「景の到するは午に在り、端有れば景と與に長し」の記述。
- 3) アリストテレス 紀元前450-350年『プラタナスあるいは他の広葉樹』での記述。
- 4) イアン・アル・ハイサム 965-1040年『光学の書』(1015-1021年)での記述。
- 5) レオナルド・ダ・ヴィンチ 1452-1519年『アトランティコ手稿』ダ・ヴィンチの創作ノート。
- 6) ジャンバッティスタ・デッラ・ポルタ 1538-1615年『自然魔術』(1558年) 実験を重視した近代科学の基となる著書。
- 7) ネアンデルタール人 約20万年前に出現し2万数千年前に絶滅。
- 8) ショーベ洞窟の壁画 約3万2000年前に描かれた 現在。知られているものでは最古。
1994年に3人の洞窟学者ジャン＝マリー・ショーヴェ、クリスチャン・イレール、エリエット・ブリュネル＝デシャンによって発見された。
- 9) ものの形をかたどって描かれた文字。絵文字からの発展によって生まれたと考えられている。
- 10) 象形文字の簡略化から発生したと言われる。エジプトのヒエログラフや楔形文字からフェニキア文字を経て
アルファベットの原型が生まれたと考えられる。アルファベットに代表

される表音文字と漢字に代表される表意文字がある。

- 11) 西垣通『こころの情報学』1999年、筑摩書房、P166
- 12) 1445年頃 ヨハネス・ゲーテンベルグが活版印刷術を発明 最初の出版物は1450年のドイツ語訳『聖書』
- 13) 西垣通『こころの情報学』1999年、筑摩書房、P171
- 14) 薬剤の調合から始まり、暗室でのフィルム、プリント共に現像・停止・定着の化学反応過程、水洗、乾燥の行程がある。
上記行程は10年ほど前までの一般的なフィルムカメラに必要なものだった。
- 15) ロラン・バルト『明るい部屋』P11-12
- 16) 同上、P.13
- 17) ヴァレム・フルッサー『写真の哲学のために』深川雅人訳、頸草社、1999年、p78-79
- 18) 伊藤俊治『寫真史』朝日出版社、1992年、P.7
- 19) 多木浩二『眼の隠喩』、青土社、1982年、P.8-9
- 20) ノーマン・ブランソン『拡張された場における〈眼差し〉』
ハル・フォスター編『視覚論』樽沼範久訳、平凡社ライブラリー、2007年、P.134
- 21) スーザン・ソントグ『写真論』1977年、近藤耕人訳、晶文社、1979年 P.16

図1 エドワード・マイブリッジ Eadweard Muybridge "Animal Locomotion" 1887年

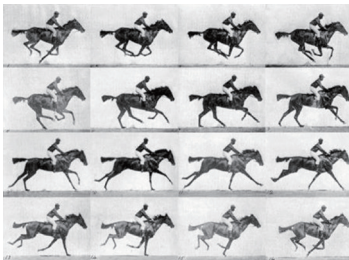


図2 様々なフレックス型カメラ・オブスクラ

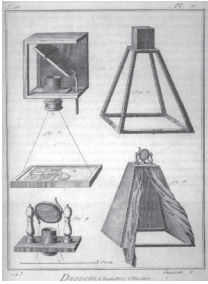
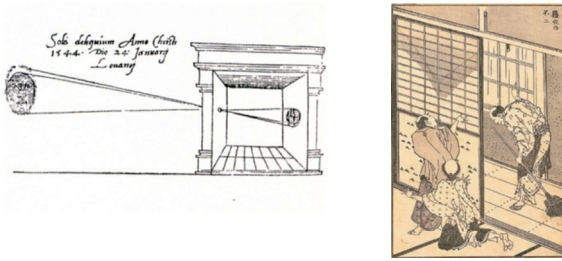


図3 1544年にフリシウス（蘭）がカメラ・オブスクラを利用して日食を観測した図



参考画像：葛飾北斎「フシ穴の富士」

カメラ・オブスクラの原理で倒立した富士山が描かれている

図4 ショーベ洞窟の壁画

動物を描いたものや、岩に手をあて顔料を吹き付け手形を残す写真の原型のようなものも

